

「おむすびっ娘」

仙台コミュニケーションアート専門学校
クリエイティブコミュニケーション科
ライトノベル・小説作家専攻
三年
平塚隼人

目の前で起こってる事を話そう。

机の上で弁当を広げて少し席を外した途端に、机の上からおにぎりが消えたのだ。

「……」

ちょっと弁当のおかずを摘むのであればいたずらの許容範囲内だが、おにぎり二つの内の一つとなれば話は別だ。

実は隠してるだけなのかもしれない、遊ぶのはどうかと思うがそれなら食べられていない可能性も……。

「おいし」

席に着いて辺りを見渡せばいたずらした奴と目を合わせられるだろう。

「でも、このおにぎりの具はなんだろ？ 知らない味……」

うん、多分この子だ。

「それ、もしかして少し塩辛い具じゃないか？ ご飯と相性もいい感じの」

「そうそれ！ なんか黒いし！」

确实、确实にオレの作ったブラックオリーブのおにぎりだ。

彼女の名前は中村(なかむら)望(のぞみ)さん、授業で殆ど関わりのない隣の席だけの顔見知り。

ついでに言うと昼休み前の授業は居眠りしていた。

「このおにぎりの具なんていうの？」

勝手に食べた自覚がもしかしてないのだろうか？

「そのおにぎり、オレのなんだが？」

「……、ごちそうさま？」

「お粗末さま、他に言う事は？」

「あ、勝手に食べてごめんなさい！」

しょぼんとされてしまうとなんだかこっちが悪いみたいな感じになるのは少し不思議な気分だ。

「せめて一言声かけてくれればあげない事もない、ついでに具はアンチョビとブラックオリーブ」

「なにそのオシャレな感じ、ぶらっくおりーぶっておにぎりに使われるとは思わなかった」
「意外な組み合わせかもしれないがご飯は塩辛いのと相性いいから結構美味いんだ、食ってわかったら？」

「そ、そだね」

味を思い出したのか会話中もおにぎりを凝視し始める。

そんなに腹へってるならご飯買って……、ああそういうことか。

「もしかして昼飯忘れたのか？」

「忘れたのではありません、ないのです」

いきなりうな垂れる始めいきなり苦労人のようなため息を吐き出すのには驚きはするが同情はしない。

そーいやまともに中村さんとまともに会話するのは初めてのよな気もする。

「ないのか」

「ないんです」

「……、食べるか？」

「いいの!? ってだめだめ、それも食べちゃいけないでしょ私！」

「食べたいんだろ？ そんな顔しながら食べてるの見られても困る」

「え、どんな顔？」

「物欲しそうな顔」

「だって貧乏だもん」

「そう言われてもな……、はいどうぞ」

「いただきます！」

こっちの弁当の主食はなくなったが、こんな日もあるとあきらめよう。

しかし本当に美味そうに……、がつついてるな。

「こっちは、ツナ？」

「ツナとタマネギ、マヨネーズは入れてない」

「これも結構美味しいじゃない！」

おにぎり二つで満足したのか満面の笑みである。

「そりゃどうも」

「ありがとね！」

そう言い残すと女子の輪に入っていった。

マジで腹減ってただけなのか……。

こっちの弁当は結構少なくなっちゃったなー。

翌日……。

教室に入るとなんだか上機嫌な中村さんがかなり早い時間に登校していた。

いつもは遅刻ギリギリだというのに珍しい。

「おはよう！」

「っはよ一、今日は早いんだな」

「まあね！」

ほんと今日は元気だな。

「今日は昼飯持ってきたんだろ？」

「ない！」

「……」

「ということでよろしくお願いします」

「……」

「やっぱダメ？」

「なんかね、朝居る時点でそんな気はしたさ、じゃあ昼休みな」

「ありがとう！」

なんかすっごい積極的、貧乏とは言ったがマジで昼飯用意できないほどギリギリなのか？

「そんなに生活やばいのか？」

「ま、まあね！」

「胸張って言う事でもないと思うがな」

「ないのはどうしようもないんだからしょうがないじゃない……」

「わかったよ、またおにぎりだけどいいか？」

「……いいの？」

「そのつもりで言ったんじゃないのか？」

「断られるとダメ元でした」

三つ作ってきて正解だったのかもしれない。

具は全部一緒だけどそこまで注文される覚えもないしな。

「じゃあ昼休みにな、具には期待すんなよ」

「大丈夫ですよーだ」

ぱあっと明るくなる顔を見ていると悪い気はしないが、なんだか乗せられているような気がしないでもなかった。

「そういや昨日の事だけどさ」

「あ、勝手に食べちゃった事？」

「どうして急に食べたんだ？」

「それはですねー、私居眠りしてたの覚えてる？」

「そりゃ隣だったからな」

「で、いつ頃目が覚めたか覚えてないんだけどね……、なんかぼやっと覚えてるだけ
なんだけどね」

「うん」

「起きたら掴んでいたんですよ、銀色の包みを」

無自覚で取ったのか、すげえ食欲だな。

「この感触は間違いなくおにぎりだ、しかし何故私は掴んでいるのだろうか？ となっ
たのです」

その時点で目を覚ませとツッコミたくなるが一先ず聞いておこう、そうしよう。

「時間は昼休み、さも当然のようにそれを開け、一口食べた所から意識がハッキリし
たかな！」

「食うまで寝ぼけてたのか」

「美味しかったからな！ 目覚めにあの塩辛さはガツンときてね、でも梅干しのように
酸っぱくないしなんだろうこの黒いの？ って思ってたらブラックオリーブとアンチョビと
かいう未知の物体と知った時は衝撃でした、ごちそうさまです今日もそんな感じな具
材だったりする!?!」

よく喋るこって。

「秘密だ、期待するな」

「そんな！ 美味しいおにぎりを作ったのはまさかの男子の手作りで私の女子力なん
て霞むほど丁寧！ しかも普段全くそんな料理できますよーって素振り無しだし、おに
ぎりも定番の具材を無視してブラックオリーブをチョイスするような男子のおにぎりを
期待するなっていうのが無理だよ！」「変に期待するなよ、オリーブも知り合いから紹
介されただけの気まぐれだし、今日はそんなに手間をかけていない」

「じゃあ昨日のツナおにぎりどうやって作ったの？」

「あれか、ツナ缶と夕飯で使い切れなかった玉ねぎを刻んで塩コショウ混ぜただけだ、
簡単だろ？」

「何時に作ったの？」

細かい、そこまできにするもんなのか？

「七時、朝食作ってる時に」

「朝だったら十分手間です！ 私なんてお金に余裕あっても朝食なんて作りません
よ！ 朝はたっぷりと睡眠と布団の感触を堪能し、六時に起きても後三分、後五分、
後二十分と気付けば登校時間が迫って急いで準備して途中のコンビニでおにぎり食
べるくらいなのに、なんでそんな早くから行動できるの!?!」

「出来ちゃいけないみたいに言うな、みんな出来るけどやらないだけできっと出来るさ、
そうしないだけで」

「本当にそうかな？」

「つーか女子力とか気にすんなら普段から色々やっつけよ、やってない事いきなりや

ろうたって出来ねえから」

「じゃあ目的があって家事とか料理してるの？」

「当たり前だ」

更に真剣な表情に睨まれたため息が出る、いちいち説明するのは面倒だが話さないともっと面倒になりそうだ。

「……まあもう答え言ってるようなもんだけどな」

「ほえ？」

「変な声出すな、単純に手間になるからやってるだけだよ」

「やる方が手間じゃない？」

「そんな時はな、だが去年一人暮らしを続けて行ってわかったんだ」

「それは一体？」

「飯を作れる様にならねえと味に飽きるし金は直ぐに無くなる、普段から綺麗にしておかねえと虫とか出てる上に邪魔でもっと面倒な事になる、それが嫌なら普段から心がける」

「……」

「そんだけだ」

「え～～、絶対それだけじゃやらないよ～～」

嘘でしょーと今にも言いそうな顔に少しだけ腹が立つ。

「わざわざ高い金だして不味い弁当と好きなもん自由に作れて量も値段も決めれる生活どっちがいい？」

「うっ」

「ゴミ袋貯めて汚い状態に変色した物体を見る羽目になるのと、綺麗な部屋どっちがいい？」

「や、やめい！」

「ま、それでもやりたくない奴は諦めてるか慣れてるかだろ？ 俺は嫌だからそうなったってだけ、実際出来る様になると楽しいからな」

「羨ましい、そうだよな、それが健全な考え方だよな、男子もどうせ汚いし女子に期待すんなよ畜生なんて考えてた時期もあるけどこうやって実際に出来る男子も当然いる訳でもちろん出来る女子……、じゃないやらない女子もこうやっているもんね、神様はどうして私をそんな風にしてしまったのかな……」

「そうやって頼ったりサボってるからだろ、誰かのせいにすんな、貧乏なのも自分のせいだったりするんじゃないのか？」

あ、やべ、これは言わなきゃよかった。

「……、全くやらなかった訳じゃないもん」

拗ねてるよ。

「わりい、ちょっと言い過ぎたよ、今日は弁当のおかずも付けるからさ」

「許す！」

「力強いなおい……」

さっきのコロコロ変わる表情は何処に行ったのやら、すっかりニコニコしていて少しホッとしていた。

「早く昼休みならないかな！」

「まだ授業すら始まってないぞ」

本日、昼食の犠牲は鮭と白ごまのおにぎり二つと弁当内のサラダ全部、よく食うなおい。

一週間後……。

あの日から昼食を作る生活になってしまっただけで更に手間が増えたが意外と楽しくなってきたこの頃。

しかし中村さんはおにぎりに妙な愛着があるようで他のメニューはリクエストしてこない。

『作ってもらうんだし、なんでもいいよ！ おにぎりがいいな！』

と、このような感じだ。

だが今日はサンドイッチである。

塵も積もれば山となるという言葉があるように中村さんの分の計算をしておらず米が思ったより早く無くなった、学校の帰りに買っていかなくてはならない。

食パンなら朝食に使っているのだから枚数はあり、具材も問題は無い。

念のため保冷剤も入れ温度対策もばっちり。

「さあ、昼食を！」

今日もテンション高く昼休み声をかけてくるが今日はちょっと気が引ける、まあ元々文句は言わないだろうし大丈夫だろう。

「ほれ」

「どれどれえ♪ ……え？」

んん？

「サンドイッチだ」

「うん、アリガトウイタダキマス」

すげえ大人しくなって黙々と食べている、まさかここまで変わるとは。

なんて顔で食べてやがる、え、そんなに不味い？

「なあおい、ちょっといいか！」

他の男子に自分のサンドイッチを分けて味を聞くが皆美味しいの一言。

え、中村さんの弁当だけやらかした!?

「食べるのストップ！ ちょっと確認させてくれ！」

「ハイ」

食べるペースが遅いので十分余っている、もし腐ってたとかなら洒落にならん！

「……、あれ、味は特に変わってないな？」

じゃあ食べたやつだけなんかおかしかったのか？

「私は悲しいよ、おにぎり君」

おにぎり君ってまさか俺の事じゃないだろうな、やだぞそんな愛称。

「私はその弁当の中身をも見た時、ものすごく衝撃を受けた、いや選べる立場じゃないのはよくわかっているけどこの数日食べたおにぎりはまだ短いけど人生で最高の味がしたんだ、それも毎日、でもね、いくら美味しいサンドイッチでもおにぎりじゃないとなんだか喜べなくなってしまうんだ、あの優しく包まれたご飯じゃないと満足できないのかもしれない、どうしてくれるんだおにぎり君」

「病院に行け馬鹿」

めちゃくちゃ焦ったじゃねえかこのやろう。

「なんでもいいと最初に言ったし、わかっているなら素直に食ってくれ、そんな顔して食べられたらミスしたとか腐ってたとか考えちまうじゃねえか」

「……、ごめんね」

「そんなにおにぎりがいいのかよ」

「うん、おにぎり君のおにぎりが食べたい」

「食べたいならその呼び方やめろ」

「努力しよう」

「明日から作らないかな」

「すいませんお願いします！」

結局サンドイッチは美味しかったらしいが、おにぎりじゃなかったショックがでかかったらしい、そんな特別なもんじゃないんだけどな。

更に一週間後、六月の月末。

高校の夏服に違和感が無くなる暑さ。

やはり今日のリクエストもおにぎりである。

『また同じ具材？ 貧相なボキャブラリーね』

そんな事は言わないだろうが思われたくはないので今日の朝もメニューに悩む。

「飽きずにおにぎりとはなあ……」

冷蔵庫の中身を確認するが目新しいのはない、ツナのバリエーションを増やして誤魔化そうかな？

「あ、これ使おう」

具材を決めると慣れ親しんだ動きで一つ一つ握っていく、今日は三つだ。

「そうだ、麦茶も持ってくるか」

すっかり中村さんを基準にメニューを決めている事に違和感が無くなっていた、食費が先月よりも少し高い。

そんなこんなで昼休み、クラスではあの二人急に仲良くなったねと女子の間で話題が出る、そして結論は弁当目的で落ち着くようだ。

惜しいな、おにぎりだけなんだよ俺の存在。

「さて今日は何かな？」

目の前で麦茶を飲みながらちょーだいと言わんばかりに手を差し出してくる、割と迷惑なはずなのに最近可愛くなって思い始めた、病院に行こうかな。

「食べてからのお楽しみ」

「つまりチャレンジメニュー、自信ない時おにぎり君具材隠すよねー」

「ぐっ」

畜生、ここ最近ですっかり思考読まれてる。

ドキドキしながら食べる様子を見ているが満足しているようだ。

二つ目で具材に注目している。

「これはすじこ？ でもなんか味がなんかそれ以外にもある、なんかすごいまろやかとかいうか、なんだか新しい具材、おにぎりなのに洋風な感じ、一番最初のオリーブとか使っちゃった系の成功しちゃってる感じなのかな？ でもすじこだよ、一体何となら愛称がよくなるのかな……これなに？ なんかすごいすじこ？」

「考えるのをあきらめたな、すじこは合ってるからもうちょい考えてみ？」

「この白いのなんだろう、塩じゃないし、砂糖でもないし……、大豆をすり潰した系の何か？」

「正解は粉チーズ、水分含んで少し膨らんでるがな」

「すじこと粉チーズという発想が私にはなかったよ、なるほどおにぎりにも粉チーズは使えるんだね！」

「単品で使うなよ、それだけじゃあこってりしすぎて不味い、よく子供用にハンバーグと焼きチーズを無理やりおにぎりにしたようなのあるからな、その応用みたいな感じだ」

「でもすじこだよ？」

「食べた感想は？」

「美味しいです！」

「結構」

一先ずうまいってよかった、まあ不味いもんだしたくないけど好みはあるからな。

「どうしたのホツとして？」

「美味いって言ってくれないかもってさ」

「そんなそんな、雑食系な私に苦手なモノなんてないよ！」

「じゃあサンドイッチでもいいんだな」

「おにぎりをお願いします」

「ダメじゃねえか、というか飽きないのかおにぎり」

「全部同じ味ならそうかもだけど毎日違うから結構驚いてる、衝撃のおにぎりインパクトから次々と出てくる別なおにぎりに感動すら覚えます、でもお金出さなきゃって考えると怖くなってくるのでこの辺で感謝と考える事をやめたいです」

「……素直だな貧乏っ子」

「いつもありがとう、これからもよろしくね！」

「これからも奢れと」

「だめ？」

最近、俺こういう言葉に弱いんだなってハッキリわかってきた。

ふつ一断るよなあ、でもなあ、この貧乏さんがなんかかわいく見えてくるから困る、騙されるな、おにぎりしか目をくれてない事に俺は気付いている。

「こ、こんくらいなら負担じゃねーし、別にいいさ」

言っちゃったよ……、来月の食費やべえかも。

「やった！ だからおにぎり君大好き！」

「えっ？」

聞き返す前に女子の輪に行ってしまった。

さて、空耳でなければ『大好き♪』とか聞こえた気がしたぞ。

またおにぎり君かよ、とかもうどうでもよくなってきたぞ、今の真意はなんだ？

どうせ友達、またはおにぎりがーと言うんだろ？

わかってるって、期待すんなって、飯だけの面倒くせえ男子を好きになるわけねえって、今だって食費の事考えてるだけだし、ついに彼女がとか思ってねーし。

……食事苦手とそうだなー、教えてやれば一緒に作るとかできんのかなー。

でもどうせおにぎり作らせられるんだろうなー、でも悪くないかもなー。

「……、やばい、顔あつつ」

机がひんやりしていて顔をくつつけると気持ちがいい。

尚、午後の授業は全く集中出来なかった模様。

またまた一週間後、七月……。

気温は更に熱くなり今月で一学期も終了でクラスが「夏どうするー？」と浮足だっている中、俺は苦悩する。

「そろそろマジでネタが切れる」

おにぎりレパートリーなんて多いわけがなくよくここまで頑張ったと自分を褒めたいがそうはいかない。

「ブラックオリーブで今日はなんとかなればいいが」

塩分が取りたい季節でもあるし、麦茶も好評で最近クラスの奴にも飲ませろと言われるのがネックだ、自分で持って来い。

しかし中村さんに『持って来いよ昼飯』なんて言えなくなっており困る、暑さって思考能力落ちる気がするんだ。

ちなみに食費はエアコンの使用頻度を落として捻出しました、暑いです。

「この暑さは厄介だ、さっさと冬になれ！」

そう唸っても変わらず、保冷剤を取り出して顔にひっつけたい気分になるが我慢する。

教室も蒸し暑く皆ぐったり気味だ。

「おはよ～、今日は一段と熱いね～」

「ああ、おは……よう」

「どしたの？」

「なんでもない！」

大好き発言で妙に意識した訳ではない、所謂夏の風物詩、夏服と汗で男子諸君には察してもらいたい。

「麦茶飲むか？」

「飲みます！ いつもさんきゅー！」

みんな黙ってる、俺も黙ろう、それがクラスの平和というものだ。

麦茶を飲み終わると急に大人しくなっていた、よく見れば考え事の様子。

「ねえ、ちょっといいかな」

「なんだ、昼飯ならまだ先だぞ……遂に朝飯作れとか言い出すのか？」

「流石にそれは多分無いよ？」

「ちょっと考えたな……、で、何？」

「おにぎりの具材なんだけどもさ……」

遂に文句か!? 一ヶ月割と頑張ったが遂に言われるか、作ってもらって文句言うのかとも思うが彼女ならさり気なく言いそうな気がしないでもない！

「作ったらどうなるのかなーって気になるのがあって」

「罰ゲームみたいな食材はダメだぞ、絶対に食材で遊ぶなよ？」

「なんでそういう方向に持っていこ……、はい普段の言動には気を付けます、でもね

おにぎり君、知ってるとは思うけど私はおにぎりに対しては多大な敬意を払っているの、まともなおにぎり作って見せろと言われたら精一杯努力しますとかしか言えないけど、きっと私のおにぎりに対する気持ちならわかってもらえると信じてるの、だから遊ぶなんて事は絶対にしたくない、そしてこういうのはレパートリーが多い君だからこそお願いするのです！」

「うん、わかった、で具材は？」

「イクラ！」

「すじこで一回作ったじゃねえか、時期を考えろ」

「……、え、すじこってイクラなの？」

「すじこからイクラを作るんだよ、確かに小さいけどさ……、何の卵か理解せずに食ってたのか？」

「魚の卵でしょ？」

「イクラは？」

「鮭の卵でしょ？」

「すじこの魚は？」

「……、なんだろう？」

「わざと言ってるだろ」

あ、真っ赤になってる。

「要はでかい奴でおにぎり作れってんだろ？ よく寿司屋で見かけるような大粒で」

「その通り！」

「今七月だぞ、秋なら旬だけどさ」

おまけにこの暑さで管理がめんどい、朝持ってきて昼までっていうのはちょっときついな。

「この時期の生ものは怖いな、すまんが秋まで待ってくれ」

「むう」

表情豊かだな、なんか代用品は無いもんかな。

「膨らませても困る、腹壊してまで食うもんでもないぞ」

つーかあれはシャリと合うからおにぎりで作っても手巻き寿司になるというか……、もう寿司で食えよ。

……寿司？

「一つ聞くが……、手巻き寿司食いに行けばいいんじゃないか」

急に顔が固まる、もしや……。

「大粒のイクラ、食べた事ないのか？」

「そ、ソナコトナイヨー」

「一度で良いから食いたくなったりとか？ まあ確かに生活苦しいからさぞ贅沢な食べもんに見えるんだらうな、今買うと高いし」

「……」

「すじこじゃ満足できないか、いや違うな、すじこ食ったから食いたくなかったとか？」

「……、仕方ないじゃない」

「よし、言ってみろ」

またがつつり喋るんだらうな一、なんかもう慣れたな一。

「だってすじこってこんな味なんだなって知ったらあの高いイクラってもっと美味しいんだらうなってなるじゃない！ そりゃ貧乏ですし、食べ物より他の物にお金使いたくなる年頃ですし、それでね、色んな発想でおにぎり作ってきた君ならイクラ使ったらホント美味しいおにぎりになるのかなって考えちゃうの、前なんて粉チーズだよ！ おしゃれなレストランの前菜みたいな組み合わせでおにぎり作ってきてしかも美味しいんだから期待しちゃうじゃない、たしかにイクラ高いな一って思うけどね、でも、それでも君ならタダで食べさせてくれるんじゃないかって……、ゴメン今の無し」

「おい、最後なんだ最後」

「食べたいんだもん！」

「小学生じゃないんだからごねるな」

「けち〜」

「待て、食わせないとはいってねえだろ」

ああもうしょうがない、考えるか。

「……いいの？」

「秋まで我慢しとけ、いいメニュー思いつかないんだ、イクラって丼ものも寿司みたくなっちゃうから新しさがねえ、これ手巻き寿司ってなったらまたガツカリすんだろ？」

「流石、わかってるね！」

「畜生覚えてろよ」

「ホントごめんって！」

「今、そっちの食費捻出してエアコンの使用頻度激減した俺に一言」

「本当にすみませんでした」

貧乏でもエアコン使っているらしい、くそう。

「と、ところで今日の具材は？」

「以前のブラックオリーブとアンチョビ、そろそろメニューも限界だな」

「結構すごいレパートリーな気もするけどね、私は塩おにぎりでもいいよ」

「毎日そうしてやろうか」

「君のなら、いいかな？」

「し、正直だな」

誤解するからやめい！

どうせあれだろ？ 名詞や主語が抜けてるんだろ？

君のおにぎりならいいとかそんなんだらうどうせ！

夏休みなったらどうせ作れないし！

つーか休みくらい俺だって勉強だのダラダラしたりするし。

中村さんってどんな水着着るんだろとか夏の私服みたいとか思ってねーし！

つーか一人悩んで馬鹿みてえじゃねーか！

「中村さんは夏休みはどうすんの？」

聞いてどうすんだよ！

「聞きたい？」

そう切り返すのかよ、畜生手玉に取られてる感すげえ！

「別に、ちょっと心配になっただけだ」

ちょっと本音じゃねーか、くそ！

「し、心配してくれるんだ……、そっか」

顔紅いのは暑さのせいですよ？

そう言ってください、幻想を抱くのはこの煩惱だけで結構です。

「嫌だぞ？ 二学期早々栄養失調で入院してましたとか」

よっし、いつもの感じだ、リズムを乱されるな、決して惑わされるな期待するだけしっぺ返しが怖いんだ。

「確かにそれは嫌かなー、おにぎり君がご飯作ってくれるなら安心だけど」

なんかすげえボディに刺さる、なんだよ、作って欲しいのかよ畜生！

「夏休みまでおにぎりはちょっとな……」

「おにぎり好きだけどそれ以外も食べるって、だって君料理すっごい得意でしょ？ サンドイッチも味はすごく良かったわけだし」

「その割に酷い顔されたがな」

「それはごめんなさい！ だって期待してたんだもんおにぎり」

やべえそろそろ本気で信じそう、この気持ちに正直になりそう。

「く、食いしん坊だな」

「まあね」

そろそろきつくなってきたところでチャイムが鳴り響く。

朝のホームルームまでの時間がこんなに長く感じる事があるとは思わなかった。

一息ついたような、ちょっとがっかりしてる自分を他所に中村さんは平然としていた、なんか悔しい。

二回目でも今日のおにぎりは満足したのか全部食べられてしまった、遠慮というものもう無いらしい。

数日後、七月、一学期の終業式……。

今日は昼飯は必要ないが癖で作って来てしまった。

昼前で終わり、午後から夏休み突入という訳だ。

仕方ないとクラスの男子が『走りだせ！ 夏休みという自由に！』とトランスしそうな
っていても、どうでもいいかと弁当を広げる。

「癖だよなあもう」

いただきます、そう言って一口食べる、今日も美味いと自画自賛。

「あっ！」

「あっ？」

「お弁当！ じゃないおにぎり持ってきてるの!？」

「お弁当で合ってるだろ、癖みたいなもんで作っちまってさ」

「じゃあ私の分も勿論あるよね！」

「悔しいが作ってしまった、食べてくれないと残る」

「そうね！ 私が食べなきゃね！」

すっかり振り回されてるな俺。

「今日も美味しい！ 鮭って結構万能だよね」

「まあ手間もないし一工夫もしやすいからなー、今日はフレークじゃないけどさ」

「なんと」

「切り身が余ったから焼いてちょちょいっとな、だから皮とかも混ぜてるし、ちょっと香ばしい」

「なるほど！ 美味しい」

「落ち着いて食べなって、あ、でも用事とかあるならそのまま持ってけよ、どこでも食べるだろ？」

「……」

「なんだよ？」

「なんか優しくなったなーって」

「いつもこんなだろ？」

「最初は結構怖かったよ？ ちょっとヤンキーっぽい癖に料理とか勉強頑張ってるし」

「あん？」

「冗談冗談、怒らないの」

ニコニコしながらおにぎりを食べてる姿は何度見ても嬉しいもんだと少しほっこりしてしまうが直ぐに気を取り直す。

「みんな帰っちゃまったな」

「そだなー」

「飯に夢中だな」

「うん」

なんか静かだな？

「この後どうすんだ？ 俺は帰るけど」

「あ、ちょっとおにぎり君に用事があるの？ ちょっと時間いいかな？」

な、なんだよ、緊張するじゃねーか。

「別にいいけど」

「ありがと、結構大事な話なんだよね」

やべえ、なんか体の中で跳ね上がった。

蝉の声も遠く感じ、なんだかどンドン緊張して顔が紅くなる。

中村さんは深呼吸を一回、どうやら本当に真面目な話のようだ。

「じ、じつはね……」

「お、おう」

「ずっとずっと言いたい事が、あったの」

「……」

「おにぎり君本当にごめんなさい、寝ぼけてご飯たべちゃったとはいえそのままズルズル甘えちゃってこんな風に弁当作ってもらってホントに嬉しかったです、しかも好物のおにぎりばっかのリクエスト答えてくれちゃうからそのままどこまで作ってくれるんだろーって気になったらどンドン気になっちゃってね！ ホントはもっと違う事とかお話ししたかったんだけどおにぎり見たらもうそればっか気になるようになってね、うん、自分でも正直に過ぎるだろ！ ってツッコミ入れるんだけどやっぱお腹は空くし美味しい物があるなら飛びついちゃうし、はしたないって思う事もあるけどなんだかおにぎり君ももしかしてまんざらじゃなかったのか思うくらいなんか嬉しそうに見えて気付いたら終業式なっちゃうし、違う違うこういう事が言いたいんじゃないかってね、ごめんなさいっていうのはそのえっと！ すいません名前を教えてください！」

「……、なんだって？」

「だからその、名前を？」

「冗談にしちゃ長すぎるだろ」

「ほ、本気です」

「これまで授業や HR の点呼で何度も呼ばれてるのに？」

「この通りお話を聞いてない事が多くて、うん、食べ物って恐ろしいよね」

「じゃあおにぎり君っていうのは……」

「名前忘れちゃったけど愛称？ みたいな？ 感じ？」

「俺に聞かれても困る」

呆れた、色々通り越して呆れた。

つーか名前マジで知らなかったんかい！

「高町(たかまち)彰(あきら)だ、忘れんなよ」

「うん、ホントゴメンねおにぎり……、タカマチ君」

「もう呼びやすい方でいい……」

だよなあ、中村さんはこんな感じだよなあ、告白とか期待してなかったし、問題ないし、つーか名前覚えられてないとか俺マジ弁当箱。

やっぱ飯程度しか考えられてないよな、なんか、こう、自分に泣きたくなってきた。

「ま、なんだ、その、夏休みも楽しくな……」

「ホント、ゴメンね」

すげえ、ただ謝られるだけでなんかすごい痛い。

自分の勘違いでここまでショックなのも驚く、軽く泣きそう、てかもう一人になりたいですはい。

「……はあ」

「ゴメン」

「謝らなくていい、大した事じゃないし、名前なんて二学期から直してきやいいだろ？ 弁当も好きでやってた事だから気にすんな……」

「嫌々じゃなかった？」

「嫌々だったら今作ってきてねーよ、結構楽しんでたんだこっちも」

「よ、よかったあ〜」

別の部分はほんっと良くないけどな！

もう帰りにえ……。

「あ、あのさタカマチ君」

「うん？」

「以前夏休みの予定聞いたじゃない？」

「ああ、それが？」

「よかったらーなんだけど、料理教えてほしいかなーって」

「おにぎりの？」

「それ以外も！」

「何処で？」

「そりゃあ私の家？ タカマチ君の所でもいいけど？」

心機一転、おいおいおいおいおいおいおい、なんだこの展開？

「だめ？」

それ弱いからやめろお！

考えろ、中村さんの事だ、期待すんな。

多分こうだ、習う→俺が作る→料理の手間が省ける、ついでに料理覚える、これだろ。

「夏休みまで飯食わせろと？」

「だ、だって！」

「よし、聞こう」

「だってしょうがないじゃない！ 私の料理この間やってみたら酷かったんだよ、ああ、こんなに私の料理って不味いんだって軽く泣いたよ！ 普段タカマチ君の料理食べれば食べる程自分の実力にはんと悲しくなって、うわ、私の女子力低すぎ……って笑えるレベルなんだよ！ 私だって美味しいって言わせたいもん、へへーんどうだあ！って見返してやろうとすればするほど、やめて食材が可哀想って深層心理が囁くのよ！ 農家さんとか見たらお客さんじゃなかったら殴るとか言われても可笑しくないよお！」

「……ごめんな、なんかホントごめん」

「うう……」

「そんなに悔しそうにせんでも。」

「わかったわかった、自分に及第点が出せる様にはなりたいんだろ？」

「そうよ！ だから教えてください！」

「強気なのか丁寧なのか、奢らされて舌を肥えさせた俺も責任あるのかそれ？」

「あ、あるの！ 一度食べればわかるの！」

「なんか怖いんだけど」

「まあでも悪くない、か？」

「わかったわかった、じゃあまず確認したい事があるんだが」

「なに？」

「そもそも俺が中村さんの部屋に行って問題ないって言えるのか？ 失礼だとわかつちやいるが昔の話を思い出すとさ……、掃除とか大丈夫なのか？」

「……………」

「よしわかった、帰り道掃除用具とゴミ袋と……」

「ひゃあああああああ！」

「なんて声上げてんだよ」

「お、女の子の部屋を勝手に掃除するの！ デリカシーってものが……」

「なら一人で出来るんだな？ 虫とかいないし、変色したやつ見ないようにして放置してないな？」

「……、た、多分？」

「料理したと言ったな、何時の話だ、生ごみはちゃんと処理したのか？ 食器もちゃんと拭いてるな？」

「お、お願いします……、怖くて触れません……」

「ああわかった、この時期だと早い方がいいな、明日やろう」

「早い!？」

「とりあえず話してると気持ちって意外と落ち着くもんだ……、さて、結構大荷物になりそうだな。」

「やっぱその、以前言ってた通りだね、そうなる前に掃除しとけて話」

「な、手間だろ？」

「でもタカマチ君がいればなんとかなる？」

「面倒事を押し付けるなよ、まあやるけどさ……、あ、サボったら料理教えないからな」

「そんな！」

「当たり前だ！ 汚いまま料理は出来ないだろ」

「そ、そうだね、うん、頑張ります」

まあどうせちょっとゴミ袋貯めてる程度だろ、でも水回りどうなってんだ？

「じゃあ買い物行くか、時間あるからそのままそっちに向かってもいいけどさ」

「その方がいいかもしれない！」

「なんでそんな危機感抱いてるんだよ？」

「そろそろバリケードが破られてるかも！」

「バリケード？ ちょっと待て、部屋じゃなくて水回りとかどうなってんだ!? そういや怖くて触れないってなんの事だ！」

「み、見てのお楽しみ？」

「お楽しみではないだろ……」

仕方ねえ、中村さんはこうだもんなあ。

「少し金下ろすか、色々買っておこう、何が出てもいいように」

「頼りになるね！」

「望さんはもう少し頼りがいがあると嬉しい」

これくらいのお返しはいいだろう、名前で呼ぶくらいは。

「……」

「どうし……、なんで真っ赤!？」

「な、なんでもない！」

あれ、結構頑張ればまた信じてもよくね？

いや学べよ俺、そう甘くはない。

「さ、買いに行こう」

「ああ」

望さんの気持ちがどんな風に転ぼうと、俺がやれる事はお節介と隠し味を込めておにぎりを届ける事くらいしか出来ないようだからなあ、その前に掃除かあ。

「そういやさ、今まで聞いてなかったけど……、なんでおにぎりそんな好きなんだ？」

ずっと聞かなかったがやはり気になる、なんだろう、やっぱ思い入れとかあるのか？

「あんまりうまく言えないんだけどね、おにぎりっていう食べ物が好きなの……、特に手作りのやつって一個ずつ丁寧に作るじゃない？ まあ人によって変わるかもだけどなんか食べてくれる人の事とか考えたりしてさ、なんかその人がわかる食べ物っていうか～、なんかやさしい食べ物なんだ、だからお母さんとかおばあちゃんのおにぎりが好きでさ……、あと、色々考えてくれるおにぎり君のおにぎりとかね」

なんかわかるようなわからないような……。
「結局おにぎり君で落ち着いたか望さん」
「ごめん、やっぱこっちの方が呼びやすいや」
「はいはい」
夏休みは苦労しそうだ。

終

Copyright(C) Jikei Group. All Right Reserved.

当サイトに掲載されている全ての画像・文章の無断転載・転用を禁止します。